

認知症施策推進計画策定に向けた 懇談会結果報告書

目 次

I. 調査の概要	1
(1) 実施の目的	1
(2) 実施概要等	1
II. 調査シートによるご意見・ご提言	2
1. 認知症への理解促進について	2
2. 認知症の方の社会参加について	4
3. 認知症の方の意思決定・権利擁護について	5
4. 認知症の方やその家族への支援について	6
5. その他	7
III. 懇談会でのご意見	8

I. 調査の概要

(1) 実施の目的

国の認知症基本法が令和6年1月に施行され、同法第13条において、市町村認知症推進計画の策定が努力義務となっています。こうした国の動向を踏まえ、小浜市高齢者福祉計画および第10期介護保険事業計画に「認知症施策推進計画」を包含して策定するため、今後の施策検討の基礎資料とすることを目的に、認知症の方に関わる各種団体、関係機関等を対象にヒアリング調査を実施し、認知症施策に対する意見を把握しました。

(2) 実施概要等

①調査シートによるヒアリング

市の認知症の方に関わる各種団体、関係機関等(8団体)を対象に調査シートによるヒアリングを実施し、課題や施策要望等の把握を行います。

②懇談会の開催

ヒアリングシートで把握された課題、施策要望を踏まえ、関係者による懇談会を開催し、課題の共有、施策要望について意見交換を行いました。

項 目	内容等
参加者	市の認知症の方に関わる各種団体、関係機関等
開催日時	令和8年6月30日(火) 13時30分～
場所	小浜市健康管理センター1階 研修会議室
懇談のテーマ	・小浜市をどのようなまちにしたいか。どのようなまちであってほしいか。 ・地域で認知症の方とその家族を支えるために小浜市に不足していることも何か。
会議事項	1. 開会 2. 自己紹介 3. 意見交換 4. 閉会

Ⅱ．調査シートによるご意見・ご提言

1．認知症への理解促進について

◆講演会や研修、講座などの充実

- 認知症への理解を促進するために、講演会や勉強会の場があるとよいと思います。
- 認知症介護の初心者を知っておくべき基礎知識や、利用できる行政サービスについて学べる機会があることが望ましいと考えます。
- 認知症基本法が施行されたことを知らない市民が多いと思われるので、これらに関する講演会等で新しい認知症観について市民も学んで理解を深めてほしい。共生社会の実現、地域づくりの重要性をうたっているため、これらに関する発信は大事である。
- 認知症サポーターは高齢化しているため、若い人の育成が急務だと思う。計画的に養成講座を開催することが必要。

◆広報の充実

- 毎月の小浜市広報に認知症の特集を連載する。
- チャンネルOで認知症の特集をして幅広い人に認知症について理解を深めてもらう。
- 年に4回（3か月に1回）小浜のつどいを実施している。小浜のつどいは世話人が中心に介護者の悩みに応えることを目的とし、市広報、チャンネルO、ケアマネジャー事業所、包括支援センターに呼びかけをしているが、参加者が少ないのが現状。困っている本人さん、そしてその家族がおられると思うが。広報の方法などに会として問題があるのではと思われる。また、内容に工夫が足りないのも原因の1つとも考えられる。

◆家族の理解促進

- 認知症の方への家族の理解がどこまでか疑問。施設へ預けられている家族は本人を理解できているのか。

◆地域での理解促進

- 認知症予防の促進に通所介護施設と地域との連携強化に向けての補助が欲しい。
- 地域の方の認知症の理解について、以前は施設等に入れてほしいといった訴えをされる方が多いと感じたが、現在は地域で見守ってくれている感じが強い。また地域の人は認知症ではないと思っていた人でも、包括が訪問すると中等度の認知症だと感じた方は多い。
- 認知症のひとり暮らしは火事の心配等でひとりで生活してもらうと困るという地域の声はいまだにあり、予防対策やサービス活用で、認知症があっても本人の状況によっては在宅での生活も可能であることの地域住民の理解が必要。
- 認知症になるには20年程の経過があるとのこと。誰もが年齢とともに物忘れ

が出て来ますが、地域で互いに気付き合う、声掛け合うことをまちづくりの中に入れて行く。

○敦賀温泉病院とのかかわりを持ちたいと考えています。しかし、本人が拒否しているのでもういいいっていません。

○市民への理解の促進。本人、家族の声の反映。本人の活躍の場。家族（ピアサポート）の場の充実。

○小浜市の人口減少の中、85歳以上ひとり暮らし高齢者が3分の1をしめ、市全体が高齢化に対応した施策が必要だと思います。その中認知症はその一部であり、高齢者が在宅でひとり暮らしを継続するための自己決定権が侵害されないサポート支援体制のさらなる構築を期待します。

◆学校での教育

○学校教育の場で認知症の理解と促進を図るよう働きかける。

◆つどいの場の充実

○認知症小浜のつどいは直接認知症の人の話し合いができて非常に参考になります。若狭認知症リンクワーカー樹の輪にも参加しています。ありがたいです。

○「つどい」を3か月1回程度行っていますが、参加者が楽しくまた意味のある会になっているか少し考えます。外出の機会等や介護者の皆さんが楽しめる会になるには、もう少し予算が必要で、計画性もある方がよいと思います。アドバイザーが必要ではないと思います。認知症サポーターとの連携などもこれから必要なのかと思います。

2. 認知症の方の社会参加について

◆移動手段の確保

- 当団体は認知症カフェとして立ちあげた。現在市内には2団体あるが、認知症の人が増えている現状からするとさらに多くの認知症カフェが必要だと思う。参加するには送迎の保障がないので、個人の責任で参加している。そのため当カフェに行きたくても、その「足」がないために断念している人がいる。送迎の「足」の確保を行政に行ってほしいと切に望む。
- 高齢者にとって「つどいの場の充実」はとても大切。しかし参加したくても歩行に困難な人への対応のあり方が課題（免許返納のためサロンに来られなくなっている人あり）。

◆市民の認知症への理解

- 社会全体のバリアフリー化は進められてきているが、認知症バリアフリーについては市民の意識は薄いと思われる。社会参加を阻む「障壁」を取り除くことについての理解を深めること。

◆居場所づくり

- つどいの場に参加できる様にする。
- 地域の見守りカフェなどは小さい単位での取組が必要と思われる。
- これからは例えば「こども食堂」などの活動に参加して、認知症とその家族が一緒にできればよいかななど思います。
- 「カフェぽ〜れ」「おひさまカフェ」には参加しました。認知症の防止にはなると思います。
- 認知症予備軍の集まりは各地にあるが、認知症の人たちだけは知らない。運営側にするといろいろと忙しく大変だが、あってもよいのでは。

◆地域での役割や活動の活性化

- 見守り・支援・予防の面は理解できるが、認知症の方の社会参加に対して不透明。活動や地域の役割を担う場所は今後どの様にしていくか。
- 生きがいづくりや社会参加の促進にある老人クラブ活動の支援やボランティア活動の活性化とどうつながっているか不透明。
- 地域での見守り（地区によって差はあるかもしれないが）気にかけてくれる住民は多いと思う。また気になる人がいれば民生委員を通して包括に連絡をくれ、関係もできていると感じた。
- ひとり暮らし高齢者世帯が増えていく中で、となり近所の声かけ合いが必要です。

3. 認知症の方の意思決定・権利擁護について

◆市民への正しい知識や制度の周知

- 特に若年認知症の人が職場や周りの適切なサポートを受けることで、仕事や社会生活を送っている実情を把握して、認知症の方の意思決定、権利擁護の重要性を市民へ知らせる。
- 制度については早いうちに知識として知っておくことは大事。他にも「家族信託制度」という名称のものもある。これらの制度を利用された方の事例など交えての講演会の開催の検討を。
- 認知症の方への対応も含め、周囲の勉強会の機会を計画的につくってもらうことは大事だと思います。
- 社会資源を十分に理解して助けを求める情報を知っている本人、家族はどれ程いるだろうか。

◆サービス利用への支援

- 成年後見制度がもう少し使いやすい（気軽に）制度設計になればよいと思う。
- 意思決定支援についてもマニュアルも出ているが、しっかり理解できていない。後見人手続きも時間がかかりすぎるのが課題。虐待については認知機能低下があると事実確認も難しい。
- 市包括支援センターの活躍を期待する。

◆交流機会の確保

- 地域の関係機関と連携を図るための交流の機会をつくっていただけるとありがたい。

◆認知症の方の家族への支援

- 認知症の方を権利擁護していくのであれば、その周囲の家族にも救いの手をのばさないといけないとも思います。
- なんとなく周りの人が本人にいつている様に思う。家族も気をつけているのではないのでしょうか。
- 認知症と思われる夫が妻を怒ったり、たたこうとした事例があり、地域包括支援センターに相談したところ、本人から介護者への場合は虐待にはあたらないということだった。本人への支援も大切だが、家族への支援も大切で難しいと思った。認知症だとDVでもないだろうし。

4. 認知症の方やその家族への支援について

◆家族への支援

- 「家族への支援」の必要性を強く思う。介護する家族は24時間のうち一時だけでも介護から離れる時間が必要。デイサービスやショートステイを利用しておられるが、加えて「訪問介護」の様に一程の時間認知症の人を介護してくれる制度があると救われると思う。
- それぞれ活動されているとは思いますが、その成果の発表や企画力がこれからの認知症施策に大事だと思います。家族の外出の機会や継続的なサポート（ケアマネジャーや保健士等専門職への支援の充実）が今後必要ではないでしょうか。
- 「家族の会」の方たちとの懇談会で、悩み・不安などお聞きし、支援として何ができるか研修することは大切だと思う。

◆早期発見のための取組の充実

- 小浜市基礎検診のときに認知症初期検査を取り入れ、早期発見につなげ早めに予防できる様なものがあるとよい。
- 老老介護の方は、早期発見につながる機会が少ない。「年齢のせい」と考えてしまう。家族が受診を勧めにくい。本人が認知症と認めたくない。と理由は様々あると思われる。小浜市でも相談窓口や認知症ケアパスを整備していますが、老老介護の方が利用につながる様な支援が充実するとよいのではないかな。
- 認知症の方、相談が増えている中で、認知症ケアパスが居宅にさらに普及すると家族に説明もしやすいかと思います。
- 「チームオレンジ」登録チームの研修会や交流会の充実。話し合う時間やレクリエーションの時間がさらにとれるとよい。
- 高齢者の認知症予防の意識は高いと思われるが、「若年性」もあることを踏まえ、注意喚起のメッセージを出すことも大切。
- 認知症を患っている本人、家族の理解のもとにオープンできる様に地域全体が手をさしのべる。

◆相談しやすい環境づくり

- 相談されたことはない。誰に相談したらよいのかわからないのでは？
- 家族がまだ認知症と認識していないときの家族の困りごと、もしかしたら認知症？と思ったとき、どこに相談すればよいか広く知られているとよいと思います。市のホームページ等に自分からたどり着ける人、民生委員などに相談できる人ばかりではないと思うので。

◆若年性認知症への支援

- 若年性認知症の方が通える場があるとよいと感じた（デイサービスの様なものでも）。

5. その他

◆多世代との交流機会

- 認知症カフェに「赤ちゃんを連れた講師」のイベントがあった。その赤ちゃんと触れ合って参加者がイキイキとなったことがあった。例えば「保育園児」と高齢者が一緒に過ごしたり、触れ合ったりする企画があるといいかなと思う。

◆地域での社会参画の促進

- 「支える」から「地域で役割を持って暮らす」ため、就労的活動・地域交流・子どもとの交流・ボランティア・地域活動参加・買い物活動等の促進が必要なのではないかと考える。通所介護施設利用者がサービスを受けるだけでなく、地域の担い手として活躍するための準備を容易にするための補助があると実施しやすい。

◆認知症検診の実施

- 「認知症検診」を5年刻みで必ず受診する様にして、早期発見につなげられるとよいのでは。医者で診断を受ければ本人も家族も納得し、早く対応できると思う（気軽に受診できる体制づくり）。

◆介護予防の推進、健康管理センターの活用

- 健康づくりのためのレクリエーション（リズムダンス、盆踊り）の講習会など一堂に集い楽しめる場として健康管理センターの開放（土・日いずれか）はできないのか（世代間交流のためにも）。
- 予防講座・教室を継続、増やして行く。

◆外出・移動の支援

- 買い物難民を少なくするため、特に市内で交通便よくするため、バスなど、またタクシー（安価）を利用できるサービスを考えたらいかがでしょうか
- 認知症予防の1つに外出支援があるとよい。足腰弱りバスに乗れない、車を手渡すとなっても楽に外出し、買い物ができることで、本人が目を見て買い物し、料理を考えることが予防につながるのでは。自分で買い物等できずサービス（ヘルパー）で対応することは簡単だが、閉じこもりを助長し、認知機能低下を促進するのでは。

◆認知症サポーターの養成

- 認知症サポーターの育成に子どもたちにもまた事業所（特にコンビニエンスストア等）の方々にも積極的に参加してもらうことはよいのではないのでしょうか。本人様のつらい気持ちや、それを乗り越えた家族も含めた話など聞ける機会も増えると思います。今後の認知症薬の話なども聞きたいです。

Ⅲ. 懇談会でのご意見

ご意見・ご提言

◆認知症の理解促進

- 学校教育の中で学ぶことが必要。
- 保育園など子どもと高齢者の交流。
- 市の広報での発信。
- 新しい認知症観など介護職員も知らないことがある、また、認知症の理解不足であると仕事での対応がづらい。家族も知らないことで介護が難しくなる。
- 病気・症状について医師から説明（本人・家族）

◆移動・外出支援

- 高齢者免許返納後の交通の問題、通院が不便（デマンドバスなど）、あいあいバスなど座れないことがある。
- 自転車では国道などの危険があり、徒歩は難しいので代わりになるものがあるとよい。
- 認知症のある方は外に出てこられていないのではないか。
- 交流するためにも外出を支援してほしい。
- 移動手段がないため、今まで行っていたサロンに行けなくなった。
- デイサービス送迎車の活用や巡回型バスの導入など移動支援。
- ヘルパーなど距離が遠いと断られるので、市の支援があるとよい。
- 市と町が連携して、おおい町デマンドバスと小浜市あいあいバスが接続すれば病院の受診がしやすくなる。

◆介護者への支援

- 介護者も悩み、苦しみがあるので、介護者の支援が大切、目を向けてほしい。
- 老老介護についての愚痴を聞いてきたが、認知症であることを知られたくない家族もいる。認知症であることを気楽に言い合えるまちになってほしい。
- 他の病気なら、見舞いや声かけがあるので、外で声をかけ合える様な地域づくりが必要では。
- 50代男性が親を介護している方が多い。
- 介護者の介護力をあげていく様な支援を。
- 家族アセスメントを行い、家族の課題の解決に結びつける。
- 介護者・介護される方のうつ病の予防
- 最後まで住み慣れた家で過ごしたい。

ご意見・ご提言

◆早期から、気軽に、相談しやすい体制

- 「少しおかしい」段階から気軽に相談できる様にしてほしい。また、カフェやつどいの場につなぐことで必要な支援へつなげられるのでは。
- 早期に相談してもらえ様に相談窓口の周知が必要です。
- 相談が増えているので若年性認知症の方でも集える場があるとよい。

◆地域での見守り・支援

- 高齢者世帯の見守り体制（家の中）
- 介護保険利用までの空白の時間の支援を。
- 在宅で暮らし続けるためには、地域・家族の理解が必要であり、地域特性などよいところを生かして、地域を育てることが必要ではないか。

◆サロン・教室について

- サロン参加者の見守りはできるが、サロンに加入していない方の様子がわかりにくい。様々な人が参加できるつどいの場を増やせないか。
- 男性の参加が少ない。
- 介護予防教室の充実。

◆人材の確保・福祉教育

- 介護職は30代、40代が少ない。福祉に興味を持てる様な講座を。
- 小浜にとどまってくれる様な支援など外国人介護労働者の確保。
- 小学生4年生では福祉の授業の依頼が社協にある。
- 中学・高校探究。
- PTA世代へ高齢者福祉の理解を深める機会を持つ。
- 元気な高齢者が活躍する場。